

2023年度 DOS,審判員,監督コーチ実施要項

文責：競技委員長 渡邊 拓実

2024年2月17日

DOS 実施要項

・DOS の仕事

- ①競技の進行
- ②服装検査
- ③スコアカードチェック
- ④記録委員長への試合結果報告
- ⑤DOS 報告書への記入

I. 会場に行く前に

①自身の大学での準備（各大学で必ずお願いします。）

各大学で下記の道具を準備し、DOS と審判員と記録に貸し出してください。

- ・ストップウォッチ 2個
- ・ホイッスル 1個
- ・レッドカード 1枚
- ・得点記録掲示板
- ・記録用長机
- ・DOS、審判員、記録用椅子

① 服装

服装に関しては基本的に自由だが、ユニフォーム等の動きやすい服が好ましい。学連から配布される赤帽子の着用は義務とする。また、荒天時は防寒着・防水着を着用しても可とする。

② 持ち物

- ・ストップウォッチ
- ・ホイッスル
- ・筆記用具(黒、赤ボールペン、メモ用紙)
- ・全日本アーチェリー連盟競技規則(2022～2023年)
- ・スマートフォン(機内モードにして携帯、必要時に使用する)
 - ・対応できないケース発生時の競技委員長への相談
 - ・関西学生アーチェリー連盟内規(2023年度)の確認
 - ・2023年度関西学生アーチェリー連盟リーグ戦申し合わせ事項の確認
 - ・DOS 実施要項(2024年度版)の確認
 - ・リーグ戦 Q&A 集の確認

II. 試合開始前

① 会場に到着したら

DOS「集合して下さい。ただいまより、〇〇大学対〇〇大学のリーグ戦第〇戦を行います。
メンバー表を交換してください」

ここで、メンバー表の記載漏れなどがいないかを確認し、もし記載漏れなど不備があればその場で訂正させる。このとき補欠選手欄が未記入の場合は、以後の選手の交代は認めない。**その場で代表者がサインをし、DOSに渡す。**

② DOSはメンバー表を審判員に渡し、服装検査、弓具検査を行う。これは補欠選手も対象である。

DOS「服装検査を行います。全員後ろを向いて下さい。」

DOSは全員が見渡せる位置まで前に出て、大学名が記載されているか、チームのユニフォームが統一されているかをチェックする。服装検査終了後、

DOS「戻って下さい。続いて、弓具検査を行います。」

審判員はメンバー表の番と名前を確認して弓具検査を行う。(DOSも手伝ってほしいです。)

弓具検査時に遅刻者がいる場合、正当と思われる理由がなければ参加を認めない。このとき、補欠選手の弓具検査と監督、コーチの確認も忘れずにする。弓具検査終了後、競技説明を行う。

DOS「この試合は1エンドごとに3射ずつ行射し制限時間は90秒間とします。弦切れ、リム折れ等弓具破損に関しましては、残り矢1本につき30秒が与えられ、補充矢の行射を行い、補充矢の行射時間は最大15分間とします。フリー練習は制限時間を3分間とし、先攻後攻それぞれ1回とし、先攻行射、矢取り、後攻行射、矢取りで行います。補欠選手のフリー練習は同チームのどの的を使用しても構いません。選手の交代を行う場合は、競技開始前もしくは各エンドの行射終了から次のエンドの開始までに代表者がDOS及び記録に選手交代届を提出して下さい。また、選手の方は的中孔チェックを必ず行うようにして下さい。その他に関しましては、全日本アーチェリー連盟競技規則、関西学生アーチェリー連盟リーグ戦規定及び申し合わせ事項によって行います。この試合のDOSは、私〇〇大学〇〇、審判員は(〇〇大学〇〇)で行います。では、先攻後攻を決めてください。」

ジャンケンで先攻後攻を決めさせて、確認する。

DOS「〇〇大学の先攻により、ただいまから約5分後の〇時〇分より競技を開始しますので、それまでに先攻チームはW.L付近に整列しておいてください。解散後、同的の選手とスコアカードの交換を行い確認しておいてください。」

「両校挨拶」

「解散してください」

開始時間は5,10分単位で設定する。

IV. 競技の進行

① フリー練習

時間になったら、会場全体の安全を確認して起立し、ホイッスルを2声鳴らす。(ムーブアップの合図)

DOS「先攻〇〇大学、フリー練習」

選手がS.Lに入るのを確認(この間は約10秒)し、ホイッスルを1声鳴らす。(行射開始の合図)

行射終了30秒前になったら30秒前コールをし、起立する。30秒前に気づかずに時間が過ぎた場合は、その時点から30秒を計測する。(極力起こらないように気を付ける)

DOS「30秒前」

行射終了 10 秒前になったら口頭でカウントダウンを行い、0 秒になったらホイッスルを 3 声鳴らす。(矢取りの合図)

DOS「10 秒前、9、8、…、3、2、1、（ホイッスル 3 声）」

カウントダウンの途中でも、全員の行射終了を確認したら、3 分間になっていなくてもホイッスルを 3 声鳴らす。

後攻でも同じように繰り返す。

フリー練習での時間外発射はひどいものではない限り注意にとどめ、点数的なペナルティーは与えない。

② 競技開始

フリー練習後、安全を確認して、ホイッスルを 2 声鳴らす。

DOS「先攻〇〇大学、50m1 回目」

約 10 秒後ホイッスルを 1 声鳴らし。行射終了 30 秒前になったら 30 秒前コールをし、起立する。30 秒前に気づかずに時間が過ぎた場合は、その時点から 30 秒を計測する。

DOS「30 秒前」

行射終了 10 秒前になったら口頭でカウントダウンを行い、0 秒になったらホイッスルを 2 声鳴らす。

DOS「10 秒前、9、8、…、3、2、1、（ホイッスル 2 声）」

カウントダウンの途中でも、全員の行射終了を確認したら、90 秒になっていなくてもホイッスルを 2 声鳴らす。

DOS「後攻〇〇大学、50m1 回目」

約 10 秒後ホイッスルを 1 声鳴らし。行射終了 30 秒前になったら 30 秒前コールをし、起立する。30 秒前に気づかずに時間が過ぎた場合は、その時点から 30 秒を計測する。

DOS「30 秒前」

行射終了 10 秒前になったら口頭でカウントダウンを行い、0 秒になったらホイッスルを 2 声鳴らす。

DOS「10 秒前、9、8、…、3、2、1、（ホイッスル 3 声）」

カウントダウンの途中でも、全員の行射終了を確認したら、90 秒になっていなくてもホイッスルを 3 声鳴らす。

審判員とともに標的面に速やかに移動し、採点を監督する。DOS、審判員の採点中の立ち位置は、標的面から 3～5m 後方である。点数ジャッジを要請された場合は、審判員に回す。

採点が終了したら標的面をチェックする。このとき、的中孔チェックの確認はしなくてもよい。

2 回目を後攻チームから行射し、1 回目と同様に行う。

これを繰り返し、50m 終了後、10 分程度の休憩を取る。

DOS「ただいまより約 10 分間の休憩を取ります。〇時〇分より競技を再開しますので、それまでに選手は W.L 付近に整列しておいて下さい。」

開始時間は 5,10 分単位で設定する。

30m も 50m 同様に行う。

V. 試合終了

① 選手全員に聞こえるように天候を連絡する。

DOS「本日の天候は(晴れ,曇り,雨)でお願いします。」

② スコアカードを回収する。受け取る際に必ず選手サイン・採点者サイン・訂正サインなどの漏れがないか、10点数及びX数も全て記載されているかを確認する。

③ 審判員と手分けしてスコアカードの承認(得点計算チェック)を行う。この承認作業によって記録が最終確定となるので、慎重に行うこと。計算間違いがあった場合は、当該選手と採点者を呼び出し、確認して訂正させる。

④ 記録集計に立ち会い、スコアカードと速報用紙(記録用紙)の得点を確認し、勝敗の確認をする。

⑤ 確認後、代表者を呼び速報用紙(記録用紙)の確認をしてもらい、サインをさせる。このサインによって団体得点、個人得点ともに最終確定となる。

⑥ 成績発表を行う。

DOS「集合して下さい。ただいまより点数発表を行います。〇〇大学〇点、〇〇大学〇点、よて、〇〇大学の勝ちとします。両校挨拶。解散して下さい。」

VI. 試合終了後(重要)

試合終了後すぐにDOSは記録用紙の写真を左側と右側に分けて鮮明に撮り、関西学連64代記録委員長まで送信して下さい。今年度のリーグ戦ではGoogleフォームでの提出に変更します。

DOS報告書を記入ののち、選手のスコアカード、記録用紙、DOS報告書などの資料を確認して封筒に戻し入れ、会場校に5月の定時総会まで保管していただくようお願いしてください。

VII. もしものときの対処法

① 弓具破損

弓具破損の判定は近くの審判員が対応に当たる。弓具破損はその選手の弓の通常の状態でなくなった場合に、修理の時間を与える。基本的に弓本体に関するトラブルは概ね認める。ただし、スタビライザーやサイトの単純な緩みなど、1~2秒で解決するものは認められない。メガネ、コンタクトレンズのトラブルなど、安全な行射が不可能となる場合は、修理、交換の時間を与える。

・弓具破損のあった選手をS.Lから下げて、弓具の修理に当たらせる。

・修理の時間は無制限とする。すぐに修理が完了した場合はそのエンドの矢取り前に残り矢1本につき30秒で補充矢の行射を行う。修理に時間がかかりそのエンドの矢取り開始までに残り矢を行射できない場合は、その距離の終了後に15分以内で補充矢の行射を行う。この場合、15分の中には採点・矢取りの時間も含まれる。まず、中断したエンドの残りの矢を1本につき30秒で行射し、採点・矢取り。その後、射ち残したエンドの矢を3射90秒で行射する。

② 標的面のトラブル

(i) 垂れ矢(ぶら下がり矢)

垂れ矢が発生した標的面のみ中断させ、そのチームの他の選手の行射を完了させる。

審判員はその標的の選手と採点相手とともにその標的面に進み採点を行い、審判員が自分のメモなどに全ての得点を記録する。その後、垂れ矢のみを抜いて的後方もしくは的の下に置く。

標的面で垂れ矢の得点を確認する前に何らかの理由で垂れ矢が落ちてしまった場合、的中孔により判断する。S.Lに戻り、残り矢1本につき30秒で補充矢の行射を行う。採点の際は審判員が立

ち会い、メモした得点と残り矢を高得点順に記入する。

(ii) 跳ね返り矢

跳ね返り矢が発生した場合、行射を中断せずにそのチームの行射を終了させる。該当選手も3射完射させる。審判員はその標的の選手と採点相手とともにその標的面に進み採点を行う。印のない的中孔が1つだけの場合、その的中孔の得点とする。また、印のない的中孔が2つ以上ある場合、最低得点帯にある印のない的中孔の得点を記録とする。

(iii) 貫通矢

跳ね返り矢と同様に処理する。標的面からは見えないが畳に矢が残っている場合は、審判員が矢を引き戻してシャフトの位置で得点の判定を行う。その後、競技の進行に差し支えない程度に貫通矢対策を行う。また、必ず貫通矢が起こったことを報告書に記載しておく。

③ 残り矢の行射について

弓具破損や垂れ矢などのトラブルがあり、残り矢を行射する場合、1本につき30秒の時間が与えられる。手順口上例は以下のとおりである。

- ・そのエンドのすぐ後に補充矢を行う場合

DOS「弓具破損(垂れ矢)のため、残り矢1本を30秒の制限時間で補充矢の行射を行います。」

※残り矢2本の場合は60秒、3本の場合は90秒と言い換える。

DOS「補充矢、(ホイッスル2声)」

約10秒後ホイッスルを1声鳴らし。行射終了30秒前になったら30秒前コールをし、起立する。30秒前に気づかずに時間が過ぎた場合は、その時点から30秒を計測する。残り矢1本の場合は10秒前からのコールのみでよい。

DOS「30秒前」

行射終了10秒前になったら口頭でカウントダウンを行い、0秒になったらホイッスルを3声鳴らす。

DOS「10秒前、9、8、...、3、2、1、(ホイッスル3声)」

制限時間経過または全員の行射が終了した時点で、行射終了のホイッスル3声鳴らす。垂れ矢の場合は、得点の確認を行う。

- ・その距離の終了後に補充矢を行う場合

DOS「弓具破損のため、ただいまから15分間補充矢の行射を行います。1エンド目は中断したエンドの残り矢が○本のため(30×残り矢数)秒の制限時間で補充矢の行射を行います。以降3射90秒の制限時間で補充矢の行射を行います。この15分間には矢取り採点の時間も含まれます。」

DOS「補充矢1回目、(ホイッスル2声)」

以降上記の残り矢と同様に補充矢を打ち切るか15分経過するまで行う。

④ 全体の行射が中断した場合

標的の後ろを人が通ったなど会場全体の安全が確保できなくなった場合などは全体の行射を中断する。この場合、射ち残している矢の数が最も多い選手を基準にして、1本につき30秒の時間を与える。例えば、残り矢2本の選手が1人でもいる場合は60秒、3本の場合は90秒となる。

⑤ タイムアウトについて

各チームの代表者からの申請により、タイムアウトを取ることができる。ただし、各チーム1回

のみである。申請がある場合、

DOS「〇〇大学、4分間のタイムアウト」

宣告と同時に4分間の計測を開始する。4分間の時間経過もしくはタイムアウトの終了を確認して、競技の進行を再開する。

⑥ 選手交代について

選手交代は代表者が選手交代届をDOSと記録席に提出することによって申請する。申請ができるのは競技開始前、もしくは各エンドの行射終了から次のエンドの開始までとする。申請があった場合、DOSは選手交代届とメンバー表を照合する。選手交代が適正であることを確認後、

DOS「〇〇大学〇的の〇〇選手、〇m〇回目より〇〇選手と交代します。」

と宣言し競技を再開する。このとき、フリー練習は行わない。選手交代したエンドの採点時、DOSは交代選手の標的の採点に立ち会い、スコアカードの交代が行われた位置をはっきりと記入する。交代後の選手の名前を選手欄に記入させる。

⑦ 警告、退場について

故意に規則に反する行為、もしくは明らかにマナー違反と思われる行為に対しては警告を与える。警告が度重なる場合、退場処分とすることができる。警告は2回目で退場とするのが妥当である。退場処分については宣告する前に必ず大会競技委員長(1級審判員)、もしくは学生役員の大会競技委員長に連絡し、確認を取ること。

⑧ その他予測していない状況が発生した場合

その場にいる審判員DOSで判断がつかない場合、学連員を通して競技委員長に連絡をしてください。すぐに気づきやすいので電話が好ましいです。

審判員実施要項

・審判員の仕事

- ①弓具検査
- ②予備タイマー、旗上げ
- ③時間外発射のチェック
- ④点数のジャッジ
- ⑤スコアカードのチェック

I. 準備

① 服装

服装に関しては基本的に自由だがユニフォーム等の動きやすい服装が好ましい。学連から配布される赤帽子の着用は義務とする。また、荒天時は正装の上から防寒着・防水着を着用しても可とする。

② 持ち物

- ・ストップウォッチ
- ・レッドカード
- ・ルーペ
- ・筆記用具(黒、赤ボールペン、メモ用紙)
- ・全日本アーチェリー連盟競技規則(2022～2023年)
- ・スマートフォン(機内モードにして携帯、必要時に使用する)
 - ・関西学生アーチェリー連盟内規(2024年度)の確認
 - ・2023年度関西学生アーチェリー連盟リーグ戦申し合わせ事項の確認
 - ・DOS実施要項(2024年度版)の確認
 - ・リーグ戦Q&A集の確認

II. 弓具検査

① メンバー表の名前と本人が一致しているかどうかの確認をする。もし間違っていたら代表者立ち会いのもとにメンバー表の訂正を行う。

② バッジの確認

学生証、会員証の確認は必要ありません。

③ 弓具

- ・サイト

ダブルサイトになっていないかどうか、照準点が2点以上ないかどうか。

- ・弦

付着物が鼻より高い位置に付いていないかどうか。また、この付着物がノッキングポイントを除いて2個以上付いていないかどうか。

- ・ハンドル

レストより高い位置に故意に付けた傷や付着物がないかどうか。

- ・矢

シャフト、ノック、ヴェインの色の組み合わせが統一されているかどうか。ただし、経年効果による変色は可とする。また、シャフトに名前またはイニシャルが入っているかどうか。

・タブ皮

故意につけた切り込みがないかどうか

その他、予備の弓具は検査時だけではなく、選手の要請があれば随時検査を行う。

Ⅲ. 行射中

① DOSと共にストップウォッチを携帯し、時間管理を行う。DOSのストップウォッチが何らかの理由で停止した場合、審判員のストップウォッチで時間管理を行う。

② 競技中矢取りの時間を除いて必ずいずれかの旗を上げる。行射をしてはいけないときは赤旗、行射をしている時で残り制限時間が30秒以上あるときは着席をして緑旗、行射をしている時で残り制限時間が30秒未満のときは起立をして黄旗をあげる。このとき、使用しない旗はできるだけ見えないようにする。

③ 行射終了15秒前になったら選手の邪魔にならないように引き手がはっきりと見える場所に移動し、時間外発射のチェックを行う。

④ 時間外発射の管理

時間外発射は審判員がこれを判定する。DOSの制限時間終了のホイッスルを聞いてその音の鳴り始めより遅く引き手が弦を離れた場合は時間外発射となる。これが発生した場合、審判員はレッドカードを掲げて選手本人と周囲の関係者に通告する。口頭でも選手本人に通告し、その後の得点記録にも立ち会う。

⑤ 弓具破損などの選手からのアピールに対して対応する。これについては、DOS実施要項Ⅶ. もしものときの対処法①を参照のこと。

⑥ 弓具検査を行っていない弓具を随時検査する。また、選手の弓具の修理に立ち会う。

Ⅳ. 得点記録

① 採点のとき、赤旗は椅子の上に置いて的前に行き、選手からの矢の判定のアピールに備える。矢の判定を行う場合は、矢や標的及び周りの畳などは触れず、必ずルーペを使用して2方向から確認したのち判定すること。判定するときは曖昧な表現を使わず、はっきりと「〇点です。」と述べること。

② 時間外発射が発生した場合、まず採点者に標的面上の3本の矢の得点を記入させ、その後、審判員が赤ペンを用いて2重線で最高点を削除し、Mに書き換え、審判員のサインとT.O.を記入する。

③ 採点終了後、矢の抜き忘れがないか、的に破損がないか、畳が大丈夫かどうかを確認する。

④ 競技終了後DOSと手分けしてスコアカードの承認(得点計算チェック)を行う。この承認作業によって記録が最終確定となるので、慎重に行うこと。計算間違いがあった場合は、当該選手と採点者を呼び出し、確認して訂正させる。

監督・コーチに関して

- ① 監督・コーチはメンバー表に記載された1名のみで、試合中に変更や交代をすることはできない。また、監督・コーチは学生でもよい。
- ② 監督・コーチはアーチェリー競技に参加するのにふさわしい服装、もしくは正装とし、靴は運動靴とする。
- ③ 男子1～8的、女子1～5的までのS.LからW.Lまでの間をコーチエリアとする。
- ④ コーチエリアからのみ選手に助言することができる。
- ⑤ S.L上の選手や弓具に触れてはならない。
- ⑥ 上記の規則に反する行為、もしくは試合の秩序を乱すような行為がなされた場合、DOSは警告を与えることができる。これが繰り返し行われた場合は、競技場からの退場を宣告することができる。退場処分については宣告する前に必ず大会競技委員長(1級審判員)、もしくは学生役員の大会競技委員長に連絡し確認を取ること。

DOS・審判員としての心得

1. 競技規則を十分に理解する。
2. 競技会の成功は競技役員の各パートの協力が不可欠である。審判員はその運営の重大な役目を果たすものである。従って、良識と知識と協調性を要する。
3. 競技会の主役は競技者である。審判員(競技役員)は競技会の主役ではなく、運営機能の一部である。
4. 審判員は競技者を取り締まるためにいるのではなく、競技会を円滑に進めるために存在する。
5. 常に競技者が最大の力を発揮できるように運営を円滑に行う。
6. 心を広く持ち、常に広い視野で状況を把握して、冷静に公平な判断を下す。
7. 不確実な判定をせず、判断に迷った場合は他の審判員や競技役員とよく相談し、正確かつ説得力のある判断を下す。
8. 疑わしい行為があっても競技規則の適用において明確な理由がない場合は、競技者が有利になるように裁定する。
9. 不正を行う競技者に対しては妥協せず、無視してはならない。

10. 競技者が競技規則を知らないために起こるだろう違反に対しては、事前に注意して規則違反や事故を未然に防ぐ努力をする。

11. 審判員はいかなるチーム(団体)にも属さない中立な立場である。従って、任務中はもちろん休憩中でも特定の選手と親しく話をしたり無駄な会話はしない。

12. 行射中は安全上の問題以外、競技者に直接話しかけず、必要ならばチームの監督(責任者)にまず知らせる。

13. 品位を持って行動し、競技者やチームの監督等に高圧的な態度をとらない。